

国士館の思い出

食堂アルバイトと寮生活で得たもの

体育学部四期生 小田 俊夫



一 大学は出たけれど、 あの映画の通りじゃ

「『大学は出たけれど』と言うあの映画の通りじゃ、大学を出ても職は無いし、今やって家で飯を食わしてやって寝かしてやっとする。高松でアパートでも借りて、そこから仕事に行ってみいー。それを東京に行つて、食う物食つて、着る物着て、授業料払つて、どなんして生活して行くんじやー、それも昼の大学に行つてー」。父親代わりの長兄善則（元高松一高教員）に進学を打ち明けたのは二一歳も過ぎていた昭和三四年早春の頃であった。大学の内容のことは全く知らず、同郷の二期生横井孝義先輩（高校時代同窓で陸上部）から「小田、お前であつたらやれんことはないから来んか」と誘われた。彼

は豪徳寺の近くにある「勝光院」に住込みで働き、境内の草抜きや掃除、忙しい時には住職さんと同行して檀家も廻つて手伝つていた。その話も何ってから二年も経っていた。経済的支援が無くとも一生懸命働いて何とか生活費や学費を工面し、七、八年は覚悟の上で悲壮な気持ちで上京した。青雲の志にはほど遠く無謀そのものであつたかも知れない。

全寮制で四月九日正気寮（現一〇号館北西側）二号室に入寮した。全国から集まつてきた新入学生で陸上関係者ばかりの部屋であつた。三年生で二期生の大坪義昭先輩（長崎）、二年生で三期生の梶原敏睦（福岡）・阿部勇（栃木）の両先輩であり、同期の宮田海山（広島）・村山信一（鹿児島）・土屋雅雄（宮崎）・向山徹（広島）・山内宏（北海道）・早田義和（兵庫）・林定夫（青森）など

で、一〇日には皇太子殿下の御成婚日で全国が慶祝ムードで湧いていた。

一二日に入学式があり来賓祝辞に松野鶴平、橋本文部大臣とある。二九日は天皇誕生日で祝日、緊張の連続であった。寮生は午前五時に起床して、柔道か剣道のどちらかを選択して朝稽古に参加することが義務づけられていた。事前にどちらにするか先輩より聞かれ、「君は高校時代何をやっていたのか」と聞かれ、「陸上競技です」と答えると、「そうか陸上か、陸上なら真つすぐに走るだろう。柔道ならガニ股になるぞ」と言われ、その先輩の一言で剣道を選択した。慌ただしい不安と緊張が一杯の寮生活がはじまったのである。

一〇月末頃になると箱根駅伝出場のため、長距離陣が正気寮二号室で合宿を張り二度ほど時習寮（現一〇号館北東側）三号室に移る。一二月頃、剣道実技の時間に大野操一郎先生に「君は初段はじきに取れるからしつかり稽古しろ」と言われた。一月三十一日杉並区荻窪の中村太郎道場で昇段審査があり、初段に合格した。初めての剣道で何か強く心に引かれるものを感じた。

二 朝刊と夕刊の新聞配達をはじめ

小熊先生曰く「寮から出ないでアルバイトをしる、君のような真面目な学生は立派だ」と勇気づけられる。一年生の終わり頃、二月二日から七月一五日迄の約半年間寮の下にある中山新聞舗で配達を取り付けた。実は別の新聞屋や牛乳配達所で働き口を交渉したが寮生であることから断られていた。資金も底を付きはじめていたので安堵した。右肩から左腰にタスキを掛け、脇下に一五〇部くらいを早朝や夕暮れを走ったり歩いたりしての配達であった。新聞購読を拡張すると一部五〇円、集金すると五〇円の収入となり、寮内に八〇部くらい拡張の時もあり大助かりでした。ある日館長宅にも購読をお願いしようと思ひ勇気を出して訪れました。館長自ら応対してくれました。「毎日新聞を購読していただけませんか」とお願いすると「毎日新聞は駄目だ」と言う。その理由は「新聞が入って無いのに集金だけは来る」と言うお叱りであった。「僕が配達するから間違いありません」と言う、「貴様目上の人には私と云いなさい」と諭された。それから毎月の集金は、こっそりとお手伝いさんをお願いすることにした。毎日午前三時頃に起床、集団生

活なので目覚まし時計も使えないので、絶えず時間を気にして目覚まし、二時頃であるときまだ一時間寝られる。さらに、二時三〇分頃になるとまだ三〇分寝られる。それも一か月くらいになると心身が順応して来て自然に目が覚めるようになって来た。配達は一時間くらいで終わる仕事なので広告を挟み込んでもバイト代は安かった。

このままでは生活できないので思案に暮れていたが、七月一五日、会計課の今泉さんから「九月から食堂のアルバイトをしないか」と勧められた。

三 活路が開けた食堂でのアルバイト

早速館長宅で面接を受ける。私の順番がきた。「手を見せなさい」。両手を差し出すと「君は奇麗に爪を切っている。食べ物を扱う人は清潔でなかったらいけない」と言われ運よく採用される。この時家庭の事情により学業続行が困難となった剣道部の鈴木重信（福島）と、館長愛馬の世話係荒井隆（新潟）と時習寮七号室となる。この出会いが生涯の心友となる。九月一七日から働き始めた。最初の仕事は「米磨ぎ」と「釜洗い」が主であり、慣れるにしたがって「飯炊き」に進んだ。五つの釜

があり、薪に火を付けるには新聞紙を堅く握り潰して火を付け、その上に薪を載せると火付きが良かった。

二〇分前後で釜の後方八割ぐらいが炊けてきて、蓋を取り、釜を手前に一八〇度廻してから、手前に溜まった水気を取り、種火で五分間ぐらい蒸すと美味しい飯が出来上がった。寒い時の「米磨ぎと釜洗い」が実に難儀だった。米磨ぎは屋外で頬かむりをして、煙突で暖をとりながら何升も洗い、炊き終わった釜はまた冷たい水で洗う。手は荒れ、指の間が赤く切れて割れ、赤切れの状態でした。就寝前には何時もハンドクリームで「桃花」と言う軟膏を擦り込んで寝るのが日課であった。

三年時の昭和三六年四月二七日、新学期に多数の女子学生が入寮し大変混雑した。午前三時三〇分起床、いつもの米磨ぎの仕事から始まる。料理長の三田喜造さん（北多磨）、加茂和夫さん（世田谷区北沢町）、長谷さん、私と同じ境遇の同期鈴木重信（福島）、これまた苦学生で二年生の阿野廣（香川）が新しく加わった。

一釜で九升炊け、六〇人分、五釜全部使って三〇〇人分、この時は四二〇人分であるから更に二釜分追加で炊くことになる。みそ汁も三釜分あり、朝は朝で釜洗いだけでなく超多忙となった。一人一合五勺で目方六〇〇g、沢庵一切れ二〇gが標準であった。食器は金の茶碗に金

の箸（フォーク）で思い思いの袋に入れて持参していた。

開食時の様子だが、他人の食器と間違えて受け取る者、なかなか食器を渡さない者、カタカタと鳴らす者で賑やかで、ことに女子は自分のご飯の食器だけに気を取られ、オカズの方はそっち除けでじっと凝視している者などで、大変愉快な毎日でした。これなど出膳の手際がよくて珍しいので、うっとりしていたのだと思います。

女子学生が入寮してきて活気があり、仕事はむとが捗った。ことに心臓の強い女性が多いのにもびっくりした。

午後は三時頃から準備に入った。食事付きで九・一〇月の二分で一万八四〇円支給され授業料四九〇〇円、寮費一〇〇〇円を納入した。三年時の一月二十九日、剣道で同期の仲間や、先輩がみんな立派な人物ばかりで、その気風に惚れ入部を申し出て認めてくれた。二月に大野操一郎先生の還暦祝いが剣道場で催され、三月には剣道二段に合格した。

四 学生達ばかりのバイト生で

調理を賄う

料理長の三田さんが脳溢血で倒れられ、加茂さん、長

谷さんと、私、鈴木、阿野の五人でスタートする。今まで釜で炊いていたご飯は四年生の四月七日より「ガス炊飯器」となり、あの冷たい水洗いから解放される。一台で三釜炊け三台で九釜となる。七月一五日から栄養士の山口洋子先生（葛飾区）が就任され、新しく献立表が作成され、調理がはじまった。この時期に剣道三段合格した。

バイト生だけで間に合わず一月二十九日より常盤寮女子陸上部六名の手伝いがあり、食券切りに鈴木隆子さん、飯盛りを下山さん・岩部さんが担当、応援が毎日交替で手伝いに来るようになり、正気寮から時習寮―青雲寮―常盤寮―富士見寮、最後に松柏寮と順調に回転するも、指導する立場の私たちは大変だった。開食時の分担は鈴木さんが食券切り（三食時のパンチ切り）、私がご飯盛り（しゃもじ三杯で六〇〇g）、阿野さんがみそ汁、他のバイト生はオカズと下手間として働いた。朝昼晩と飯盛りばかりを担当していた。お陰で肩や腕の筋力も鍛えられた。調理の腕も上がり、千キャベツを刻みながら、後輩たちにアレコレと指図が出来るまでに腕は上達した。

四年生の二月一九日の献立は「最初に鳥挽き肉を炒めておいて人参、椎茸、玉ねぎを入れて柔らかくしてお

く、塩と砂糖で少々味を付けておき、豆腐の絞ったのをに入れてよくかき廻す。火は弱火でよく炊き付ける」と記述されていた。しかし、新年始まりの七日に、山口栄養士さんが退職され、食堂専任の加茂さん、長谷さんも退職する。小田、鈴木、阿野の三人が主力となる。食堂バイトのメンバーに四年生小田・鈴木、三年生に阿野・上野勝（福岡）・野中覚、二年生に林正（北海道）・松崎弘史（香川）、一年生に川西和夫（高知）・粥川昭弘（北海道）・田川直彦（兵庫）・越坂入久などでした。六月頃になると地元母校での教育実習、教員採用試験（香川、神戸市）や二次面接試験などで度々食堂を離れることが多かった。

ある日、越坂君が私と鈴木さんの靴を奇麗に磨いてくれていた。食堂でも実によく働く後輩で「お土産を買って帰るから」と言う、「お土産よりも採用試験に合格して下さい」と言うのでますます感服した。

創立記念講演が終わり、学生監の小熊康之先生より「小田ちよつと来い」と言うので食堂の中に入って行く、「今日は朝早くから来て朝飯を食べてないから飯を食わせろ」という要望で早速準備して差し上げる。食べ終わると、「残り少ないから一生懸命努力せよ」と言う励ましの言葉でした。五〇歳になるが大学の夜間で三年

生になり、法科を専攻していることを話され、「暇を見つけて一度鈴木と二人で遊びに来い」と言う有り難い言葉をいただいた。新年正月二日、川崎市生田まで鈴木さんと訪問した。

三月一五日、待ちに待った第四期生卒業式が盛大に挙行され、館長からひとり一人卒業証書が授与された。寮生賞や皆勤賞まで、また立派な辞書までいただき感無量の一瞬だった。翌一六日食堂での最後の朝食を作り学校を後にした。夢に向かって歩みだした門出の朝だった。

五 おわりに

昭和三八年三月一五日、無事に卒業してから五二年が過ぎる。当時の食堂アルバイトも寮生活のことも遠い昔日のことで記憶の風化が著しく思い出せない。

思案に暮れていたが、日誌にその日の行動の記述を書き綴っていた自分史があった。入学から卒業まで年月を追って回想してみた。四年間の寮生活では毎日が規則正しい時間との闘いであった。朝夕の点呼で時間を守ることの大切さ、先輩、同僚、後輩の礼儀作法の実践、思いやりもあり助け合った集団生活、北は北海道から南は沖縄まで、全国から集まってきた同窓との強い絆は今日も



昭和 59 年 8 月 19 日 小熊先生を囲んで（前列左より 2 人目小熊先生、3 人目筆者）

続いている。寮生活が人間形成を培ってくれた。人に優しく自分に厳しい人格も身につけることができた。

国士館大学だからこそ成し遂げられた賜物であった。

二度と見る事の無かった日記を半世紀振りに繙く^{ひもとく}。葛藤あり、経済的危機ありで本当に苦しかった。あの時の情景が少しずつ蘇った。三年生の秋頃、「疲労困憊から頭痛と発熱の体調不良となり医務室で八日間寝込む。その間嫌とも言わずに食事を運んでくれた同室の荒井隆さん、後輩の山城重喜さんに助けられる」と記述にあり。

丈夫に産んでくれ、我慢して耐えることや、優しさを教えてくれた母は「俊夫が卒業するまで生きたらんかもわからん」と言って嘆いていたが、八八歳の米寿まで生き延び天寿を全とうした。仏壇の前で父親代わりの兄に言われた「食う物食って、着る物着て、授業料払って四年で」無事に卒業でき兄に報告すると、「お前は一人じゃけん出来たんだ」と言われたが、知人には自慢の末弟と吹聴していたようでした。それにしても、必死で初志貫徹を貫き通し頑張った。その原点は一体何であったのか。

創立者柴田徳次郎先生のお教えと感化の賜物であった。大学の先生や多くの同窓などに助けられ励まされ成し遂げることが出来た。大きな夢が実現したが、自分だ

けでなく一生懸命努力している同僚が存在して居た事も知っている。田舎に帰って大いに美酒に酔ったことは言うまでもありません。

休業中の収入源となったアルバイト先

高松電話局建設現場（夏休）

東横白木屋デパートの配達（冬休）

前川製氷会社 目黒 夜勤（夏休）

国分商事スクラップ工場 池袋（冬休）

餅つき屋 夜勤 三軒茶屋（冬休）

大学の夜警（冬休）

当時の生活状況

散髪代二五〇円 風呂代一六円―一九円

牛乳代一九円 切手代一〇円 映画代一〇〇円

日当三五〇―四〇〇円（スクラップ工場八〇〇円）

奨学資金も含めて四年間で五八万七七一六円

追想 阿野 廣先生を偲んで

昭和三九年四月、卒業と同時に公立高校の保健体育の

教師に採用され、教育界・体育界の発展にご尽力される。特に陸上競技の走高跳では県代表の国体選手とし活躍される。永年の勤務と部活動の指導などの功績を高く評価され、文化の日には教育功労賞を受賞される。

また、香川県支部同窓会活動では副会長として支部の発展と活性化のために多大のご尽力を賜る。

平成二六年三月中旬頃から、体調不良を訴えていたが今年初め頃症状が悪化する。心配して後輩の川西和夫氏（須崎市）が駆けつけて来る。二月頃には同期の下城重喜氏（大分）が訪ねて来るから、と言って直接本人から連絡を受けご自宅にうかがう。その日午後九時三〇分頃までお邪魔しました。別れ際に「今度会う時には全快祝いをするぞ」と言って別れる。下城さんは阿野さん宅で起居を伴に一泊した。四月突然の悲報を聞き啞然とする。生前には「財産を残すより人材を残さないかん」と言っていた言葉が強く印象に残りました。

労苦を共にして来た学生時代だけに誠に無念です。在学中には食堂でのアルバイトで自立して働き、誠実で責任感が強く、実行力を思う存分發揮されました。

忘れないある日の出来ごと。就寝中に停電があり、私と鈴木さんが寝過ごして遅刻、慌て食堂に駆けつけると、ローソクの明かりの中で、阿野さん一人が黙々と働

いていて、すでに二釜には火が付いていた。

古希を迎えた七〇歳の時、マスターズの陸上競技を始める。龍馬競技場で開催された四国マスターズ大会に出場の折り川西氏の別荘で一泊。九月下旬の全日本マスターズ宮崎大会では、土屋雅雄氏宅で卒業以来の旧交を温めた。

翌日、鹿児島中央駅近くのホテルで村山信一氏と四五年振りに再会する。共に寮生活を過ごした同窓であり、懐かしく楽しい旅行であった。

人生の無情感と喪失感だけが残った。

別れの日、白い菊の花一輪を捧げる。在りし日のお姿を偲び謹んで心よりご冥福をお祈り致します。安らかに
お眠り下さい。 合掌